

環境ホルモン総合

環境ホルモン研究の中心的機関として

生物のライフステージの中で、環境の影響を最も受けやすいのは、胎児や乳幼児の段階と考えられています。この時期は、細胞が分裂してやがて臓器などの器官に分化していったり、更には器官が発達して機能を発揮するようになる大切な時期です。そしてそのような分化や発達には極めて微量のホルモンが信号伝達役として関与しています。もし誤った信号が伝えられると、生体はコントロールを失い、それが成長の時に起こると不可逆的な変化として身体に残ってしまいます。これが内分泌（ホルモン）攪乱と呼ばれる現象です。

私たちの身の回りの化学物質の中には、ホルモンと似た作用を持つもの（ホルモンもどき）やホルモンの作用を邪魔する物質があります。これが環境ホルモンと呼ばれるものです。環境ホルモンの影響は、それを浴びるチャンスが多い野生生物に見られています。船底塗料に用いられた有機スズによって、メスの巻貝がオス化したり、水中に含まれる女性ホルモン作用を持つ物質によって河川や海の魚にメス化が見られています。外国においては、ワニのペニスが小さくなったり、海鳥のメス同士での営巣行動が報告されています。



海水及び淡水実験ゾーン（流水式曝露装置）



化学・実験ゾーン（LC/MS/MS）



動物実験ゾーン